

2017 年度事業計画および 2016 年度事業経過の概要

I. 2017 年度事業計画

当財団の財務的な運営基盤は、従来、ソニー(株)からの寄付金と、財団が保有する基本財産の運用益に立脚していましたが、昨今の金融環境の大きな変化に伴い、今後は、基本財産の運用益の大幅な減少が見込まれます。これは、従来のやり方では、財務的な運営基盤の維持が困難になることを意味しています。こうした状況を踏まえ、2017 年度からの 10 年間は経過措置として、毎年、必要な活動資金は基本財産より賄うことにいたします（経過措置後は、ソニー(株)からの寄付を復活）。また、2020 年度には、学習指導要領の改訂により、新たにプログラミング教育が導入されます。当財団におきましても、これを新たな事業領域として位置づけ、支援に向けた体制づくりに取組むと共に、必要となる活動資金を確実に手当てしてまいります。

1. 幼児教育への支援

「科学する心を育てる」が当事業の主題であるが、入選園による事例報告や研究会・発表会、毎年発行する「実践事例集」などのあらゆる機会や媒体を活用し、乳幼児期の「主体性・感性・創造性」の重要性を訴求し続けることで、保育者の資質の向上に貢献する。また、本主題を目指す保育の実践が、2018 年度に改定される幼稚園教育要領、保育所保育指針などに沿った幼児教育の実現と保育の質の向上につながることを、当財団が関わる各種研究会や実践論文の事例などから明らかにして行く。

(1) 「ソニー幼児教育支援プログラム」での実践論文の募集

①2016 年度は、一昨年より応募園が若干、減少したため、2017 年度は、応募実績のない地域への広報により努め（昨年度は特に、応募が1園のみであった県からの応募が減ったため）、一昨年実績（111園）を上回る応募件数を目標とする。具体的には、過去の応募園や市区町村の保育課・教育委員会への協力要請をはじめ、ソニー科学教育研究会（SSTA）の先生方を通じた各地域の園への積極的な広報や、保育に関する諸研究団体（保育学会、全国幼児教育研究会など）を通じた普及活動を展開する。

②各地の園で論文説明会を開催するが、現時点では論文説明を希望している、福島、埼玉、東京、新潟、愛知、京都、兵庫、奈良、大分、沖縄の 10 か所を予定している。この機会を利用して、論文応募への取組み方や、主題「科学する心」についての考え方などを協議する「ワークショップ」を開催し、保育者の保育実践への支援に繋がる有益な機会とする。

(2) 「最優秀園実践発表会」や「優秀園実践提案研究会」などの研究会の開催

①**最優秀園実践発表会**：2016 年度的最優秀園を受賞した、「社会福祉法人ゆずり葉会深井こども園」では 6 月 17 日に、「奈良市立都跡こども園」では 7 月 8 日の開催が決まった。記念講演として、深井こども園は秋田喜代美氏を、都跡こども園は大豆生田啓友氏をそれぞれ講師として招聘する。いずれの講師も幼児教育分野での第一人者で、本プログラムの審査委員や発表会・研究会での講師を務めていただいている。主題「科学する心を育てる」や、それぞれの園の論文の実践についても精通されている。

②**優秀園実践提案研究会**：2016 年度に優秀園を受賞した園（13 園）が自主的に主催するもので、参加者の「科学する心」の理解を深め、保育の質の向上につなげる研究会である。このうち、審査委員特別賞を受賞した「幸

田町立豊坂保育園」では、6月10日に本プログラムの審査委員長小泉英明氏を講師にお招きして開催する。

また、初入选した園や研究会開催の少ない地域の園での開催を重点的に働きかけることで、開催園はもとより、地域から参加される保育者の資質の向上に寄与していく。また、保育者のみならず、周辺の小学校や各種教育機関からの参加も得て、活発な意見交換の場とする。現時点で既に7園から開催の申し出がある。

③地域自主研究会：2014年度より、地域で5園以上が自主的に集い、継続して「科学する心を育てる保育」を目指し、地域に拡げることが目的に取り組む研究会に対し、毎年、活動費を助成している。現在、島根、大阪が活動を継続しており、また、奈良が活動を始めている。2017年度は長野が加わる予定であり、少しずつではあるが、対象地域が拡大している。報告書などで活動の実態や成果を把握し、連携を図りつつ引き続き支援していく。また、今後の活動が期待される地域（新潟、宮城など）への積極的な働きかけを行い、対象地域を広げていく。

④「他園に学ぶ」保育者研修：2016年度より、“意欲の高い保育者”が、優れた実践を積み重ねている園を訪問し、保育に直接触れて、自ら学ぶ機会としたり、“保育の質の向上を目指す園同士”が互いの保育に触れ合い、学びを交流したりする新たな研修会を始めたが、参加した研修者や園より有意義であったとの高い評価が得られたことから、今年度も継続する。

a)「保育者の交流」：昨年と同様、最優秀園（2園）および優秀園 審査委員特別賞の受賞園が開催する発表会や研究会（計3回）に、全国の保育者から、各回5名程度（計15名程度）の参加者を公募し、交通費を助成する。これにより、優れた園の保育に直接触れ、主題に迫る保育について協議することで、保育の質の向上を目指す「保育者の学びの機会」としていただく。参加者からは、研修により学んだことを自園の保育に活かしたり、保育実践に結び付けたりした報告書を提出いただく。

b)「園と園を結ぶ交流」：「科学する心を育てる」主題に取り組んでいる園同士が、相互の保育や研究会を通じて交流し、その成果を自園の実践に活かせるよう「他園の保育に学ぶ機会」を提供する。昨年は、兵庫と大阪の各1園が、宮城と山形の各1園が相互に交流したことから、各園には運営費と保育者が行き来するための交通費を助成した。当年度も、新たな地域の園を対象とし、同様の支援を行う（4園を対象）。

⑤全国幼児教育特別研修会（仮称） *新企画

上記①～④の各種研修会・研究会は、主催する各園に対し財団は助成を通じた支援をしているが、研鑽する機会のニーズが益々高まっていることから、財団として、「科学する心を育てる」保育を継続して実践している園の意欲的な保育者を募り、事例研究やワークショップ、講演会などを通して、保育の質の向上を目指す研修会を企画する。全国各地から集まりやすい地域で、保育者が研修の時間を取りやすい8月に実施し、参加者には交通費を助成する。

⑥保育者ネットワークの構築 *新企画

財団は、論文応募園の研究代表や保育者、各種研修会・研究会（上記①～④）への参加者など、毎年、大勢の保育関係者との接点があるものの、継続した情報提供ができていないため、「人的ネットワーク化」の一つの方策として、希望者への「メールマガジンの配信」を始める。主題「科学する心を育てる」保育を目指す方々に、財団が関わる研究会等の有用な情報を提供することで、保育者への支援につなげる。

（3）実践事例の紹介

応募論文より優れた実践事例を取上げ、毎週、ホームページに「保育のヒント」として、新たな事例を掲載する取り組みは継続する（本年度中に700事例に達する見込み）。また、当年度も、「科学する心を育てる実践事例集（Vol.14）」の発行にあたり、論文審査委員に監修いただいております。4月以降、各地の研究会などで幅広く活用する。

今回は、「科学する心」が育まれる保育に魅力を感じ、子ども主体の保育の実践に参考となる事例や、2018 年度に改定される幼稚園教育要領などが取上げる、「幼児教育修了までに身に付ける 10 の資質能力」について考えるきっかけとなる内容を盛り込む。近年、保育者に加え、多くの保育関係の専門家や保育者をめざす学生からの配布申込みが大幅に増加しており、今年度は 6,000 部を準備する。

(4) 「科学する心を見つけよう」フォトコンテスト

保護者を対象に、「科学する心を見つけよう」フォトコンテスト（第 10 回）の作品を募集する。4 月には、入選作品をホームページに掲載すると同時に、各地の科学館やソニーストアと連携して展示するなど、フォトコンテストの普及を図る。2016 年度に、第 10 回を記念して、写真集「科学する心みつけた！」の冊子を作成しており、「心をはぐくむ」の冊子と一緒に保護者、幼児教育関係者や小学校の教員などに広く配布することで、「科学する心」をより深く理解してもらおう。

(5) 「心をはぐくむ」冊子

2013 年度に、井深ファウンダーの子育てに関するメッセージを編さんした「心をはぐくむ」冊子は、好評につき、保育所・幼稚園・認定こども園などを通じて、既に 2 万 5 千部を超えて配布している。今年度も、上記（4）に記載の通り、配布を継続し、趣旨を浸透させていく。

2. 子ども科学教育への支援

「科学が好きな子どもを育てる」を主題に、教育実践と次年度計画に関する論文を募集し、優れた取組みの学校に対して助成を行うのが「ソニー子ども科学教育プログラム」である。最優秀校は受賞の翌年に、「子ども科学教育研究全国大会」を開催し、全国の教育関係者にその取組みを公開している。

(1) 「ソニー子ども科学教育プログラム」での教育実践論文の募集

2017 年度は、前年実績（220 校）を上回る応募件数を目標とする。この普及に向け、ソニー科学教育研究会（SSTA）の各支部を訪問しての論文説明会や各地の教育委員会を通じた募集、全国中学校理科教育研究会、全国小学校理科教育研究協議会、日本初等理科教育研究会などの理科教育推進団体と連携した広報活動を行う。加えて、小・中学校の学習内容を「科学の原理・法則」でとらえ直す「理科みらい塾」や、SSTA の支部にて開催する「理科みらい講座」に参加する若手教員への積極的な働きかけを通じて、主題に取組む教員の裾野を広げていく。また、2017 年度の論文の応募要項の表紙を一新し、論文を通じた財団からの助成内容が分かりやすく伝わるよう改善する。

(2) 「子ども科学教育研究全国大会」の開催

2016 年度に最優秀校を受賞した諏訪市立中洲小学校は、9 月 22 日に「子ども科学教育研究全国大会」（公開授業・研究発表・入選校によるポスターセッションなど）を、長野県や諏訪市の教育委員会、並びに地域の理科教育推進団体の協力を得て開催する。全国の小中学校の教員、ソニー科学教育研究会の会員や教育関係者などが参集し、理科教育に関わる情報交換や教員同士の交流を図る。この全国大会を通じて、「科学が好きな子ども」を育てる取組みが全国各地に広がり、活発な活動が展開されることを期待している。

3. 教員に対する支援

1963 年に、ソニー理科教育振興資金の受賞校を会員として、「理科教育振興資金受賞校連盟」を結成。ソニー教育財団（当時はソニー教育振興財団）は、同連盟が行う教員への研修活動などを長年にわたり支援してきた。2002 年には、同連盟が「ソニー科学教育研究会（SSTA）」に改組されたが、以降も積極的に支援を続けている。

また、全国中学校理科教育研究会、全国小学校理科教育研究協議会、日本初等理科教育研究会などの志を同じくする団体にも、各団体の独立性を尊重しつつ連携支援を行っている。

(1) ソニー科学教育研究会 (SSTA) への支援

SSTAは、「科学が好きな子どもを育てる」教育を、情熱をもって推進する教員の自主的な集まりで、全国に48支部あり、2千名を超える会員を擁している。いくつかの支部をまとめたブロック（九州、西日本、中日本、東日本）や、全国レベルにおいて、会員を対象とした研究会や研修会などを開催しているが、当財団は、財政面のみならず、企画・運営面においてもこれらの活動を支援している。

① SSTAの活性化

SSTAの各支部は、原則として都道府県を活動単位としているが、各支部の活動は、地域の事情（専科制などの制度面、教員の年齢構成など）により多様なため、毎年の支部への訪問により密なコミュニケーションを図り、支部の実情やニーズを把握することで、SSTA事務局とも連携して適宜適切な支援に努めている。2017年度の主な取り組みは以下のとおり。

- ・2014年度より、各ブロックでの活動の活性化を目的として「ブロック特別助成」を開始し、研修会の開催への支援などを行ってきたが、新規会員の獲得や研修会の充実などの成果がでており、より有効な活用となるよう後押しする。
- ・2016年度に、「SSTA専用ホームページ」を全面リニューアルし、ユーザーフレンドリーな画面構成と良好なアクセス環境を整えたこと、また、各支部の紹介サイトのコンテンツも充実したことで、WebからのSSTAへの新規入会申し込みにもつながって（増えて）いる。引き続き、コンテンツの充実に努めていく。
- ・2015年度に、財団で始めた「SSTA通信」の発行（1月と6月の年2回）は、その後、SSTA内に編集委員会が立ち上がり、自らの会報誌として紙面の充実が図られており、会員をつなげる媒体として、また、非会員を勧誘する際のアピールの題材としても有効に活用されている。充実した会報となるよう、編集委員会を支援していく。

② 「全国特別研修会」の開催

本研修会は、SSTAの研修体系の最上位に位置づけられており、科学教育の中核を担う、若手を指導するリーダー教員を養成するための1期2年間の研修会である。2017年度も、7月28日～31日の日程で、昨年度と同様、丸紅多摩研修センターにて開催する。第8期は、「子どもが学びを活かすことを通して、創造性が高まる授業」をサブテーマとしており、今年度は、この2年次として、1年次に作成した指導案と授業実践を基に単元を再構築し、「科学が好きな子ども」を育てる実践を具現化する。

③ 「ブロック特別研修会」の開催

本研修会は、各支部で中堅的な役割を担う教員の養成を目的とした研修会である。ブロック内の各支部が相互に協力して実施することで、ブロックのみならず、各支部の人材の育成や活性化にもつながっている。2017年度は、埼玉・新潟・広島・熊本の4か所で開催される。

④ 「若手教員研修会」の開催

本研修会は、SSTAの会員・非会員を問わず、これからの理科教育を担う若手の教員を対象にしており、SSTAの活動を多くの若い先生方に認知してもらう良い機会である。参加者の満足度は高いため、研修会後にSSTAへの入会に結びつけていくことが課題である。本研修会は、参加する若手教員だけでなく、指導する立場となる開催支部の中堅教員の資質向上や支部の活性化にも有効に働いている。2017年度は、福島・山梨・福井・岡山・沖縄の5か所で開催される。

⑤ 「理科みらい塾」および SSTA 支部での「理科みらい講座」の開催

SSTA の若手教員の育成を目的に、「科学する心」を育むうえでの両輪となる、「理科の授業づくり」と「科学の原理・法則」を探究したり、最先端技術に触れたりする機会として、昨年度に続き、1泊2日の「第3回 理科みらい塾」を8月に開催する（参加者は20名程度）。また、できるだけ多くの全国の教員に、「科学の原理・法則」を実験・測定を通して学んでもらうために、昨年度より、SSTAの支部に出向いて行う「理科みらい講座」を始めたが、2017年度は10支部を目標に開催する。一方、財団が主催するこれらの研修会に参加できる教員の数は限られるため、各研修のカリキュラムからエッセンスを抜き出し、「解説書」として明文化して配布することで、より多くの教員に学んでもらえる機会を提供する。

⑥ STEM 教育及びプログラミング教育への支援強化

2020年度の学習指導要領の改訂による新たなプログラミング教育の導入により、財団としてもこの支援に向けた体制づくりに取組んでいくが、2017年度は、2018年度からの本格始動に向けた準備（実行計画の策定・活動経費の見積り・支援要員の確保など）を進める。特に、ソニーグループのSTEM教育事業（KOOV：ソニーグローバルエデュケーション(株)が手掛けるロボット・プログラミング学習キット / MESH：ソニー(株)が手掛ける電子ブロック）とも連携し、今後の具体的な展開の仕方を検討すると共に、例えば、SSTAの教員に、これらの機器に触れてもらう機会の提供などを通じて、機器の認知度向上や普及、並びに具体的な教材化への知見を得ていく。

（2）海外の教育団体との交流活動

海外の優れた実践を学ぶ機会とするため、2010年よりオーストラリアの全国的な理科教員の研究組織である ASTA（Australia Science Teachers Association）との相互訪問を行っている。教員の派遣については、2016年度に引き続き、SSTA 会員を対象に「公募制」とし、海外での授業や教員の異文化交流に積極的に参加したいと考える教員を選考する。また、選考にあたっては新たに、現地校との交流経験を活かし、帰国後、子どもたち、教員や学校同士が継続して交流する考えのある方を重視する。一方、ASTAの教員の受入れについては、ASTA側が本事業へのサポーター（金銭的支援者）を得たことから、来日する教員数を増やしたいとの意向を伝えてきている。ASTA側のデマンドを確認するとともに、SSTAとは日本での受入れ態勢について検討を進める。

4. 科学の泉－子ども夢教室

「科学の泉」は、『自然に学ぶ』をテーマに、小学校5年生から中学校2年生までの約30名の塾生が参加し、白川英樹理事を塾長に、指導員として全国から公募した小中学校の教員の協力を得て開催している自然体験教室である。2005年以降、毎年開催しており、今回で13回目となる。異学年によるグループ活動を通じて協力し合い、仲間や指導員と寝起きを共にしながら、大自然の中で「自ら疑問をもち、よく観察し、よく考える」を大切に探究することで、学校の授業ではできない体験を目指している。2017年度は、8月6日～11日（5泊6日）の日程で、新潟県十日町市当間高原にて開催する。ここは、2012年～2014年度に開催しており、運営のノウハウもあることから、恵まれた自然環境の中で充実した活動が期待できる。指導員7名の選考は終えており、既に活動の準備に入っている。また、塾生は、2月13日～4月14日で公募する。毎年、開催している「交流会」については、3月19日（日）に、第1回から12回までの塾生を集めてソニー本社にて開催する。現時点で110名を超える塾生および20名の指導員からの参加申し込みがあり、昨年に続き、塾生による導電性フィルムスピーカーの演奏など、思い出に残る企画を盛り込み、塾生同士のつながりや学び合いを支援していく。

5. ソニーものづくり教室

ソニーの技術者や SSTA の教員が講師や指導スタッフとして、小学校高学年～中学校の児童・生徒を対象に、「ものづくり教室」を開催し、科学への興味や関心を高める活動。ソニーグループ会社や SSTA 支部への金銭的支援を継続するとともに、新規事業に着手する。1 つ目は、「ものづくり基金」への寄付者である篤志家の希望でもある“高校生”への支援。スーパーサイエンスハイスクール等、高等学校が望む支援をヒアリングしつつ、ソニー教育財団およびソニー株式会社として提供できる体験の場を検討する。2 つ目は、プログラミング教育の推進。KOOV(ロボット・プログラミング学習キット：ソニーグローバルエデュケーション)、MESH（電子ブロック：ソニー株式会社）など、子どもたちが気負いなくプログラミングを体験できるソニーの資産を活用し、2020 年のプログラミング教育必修化に向けた子ども・教員支援の形を整える。

6. 対外広報活動

財団の情報が集約されている「ホームページ」と、閲覧者数が増加傾向にある「Facebook」の 2 つのデジタルコンテンツを活用し、教育・保育現場の先生方への有益な情報や、財団が掲げる「科学する心」の理解を深めるための情報の対外発信を強化する。プレスリリースの配信、教育関連新聞や地方紙を中心としたメディアへの情報発信など、限られた予算を有効に活用した広報活動も継続する。ここ 3 年、財団ホームページリニューアル、Facebook 開設、SSTA 通信創刊、SSTA ホームページリニューアルとさまざまな改良を行ってきたが、今年度は一度振り返り、その評価、サーベイを実施する。

II. 2016 年度事業経過の概要

2016 年度も昨年度に引き続き、ソニー（株）からの寄付金が無く、財政的に厳しい状況に置かれたが、ソニー教育財団が目指してきた主題である「科学する心」の浸透に的を絞った活動を展開している。

1. 幼児教育および子ども科学教育への支援

当財団の活動の柱は、実践論文の募集を主体とする 2 つの教育助成、「ソニー子ども科学教育プログラム」（小・中学校を対象）と「ソニー幼児教育支援プログラム」（保育所・幼稚園・認定こども園を対象）である。それぞれ「科学が好きな子どもを育てる」、「科学する心を育てる」を主題として実践論文を募集し、特色のある優れた教育を行う学校・園への助成を行っている。当年度は、「子ども科学教育プログラム」で 220 件（昨年比+12 件）、「幼児教育支援プログラム」で 109 件（同▲2 件）と、「子ども科学教育プログラム」は、昨年を大きく上回る応募となった。これは、ソニー科学教育研究会（SSTA）が主催する「SSTA 全国特別研修会」などの研修会への参加者や、「科学の泉」の指導員への論文応募の働きかけに加え、「理科みらい塾」や新たにスタートした「理科みらい講座」に参加した若手教員に、論文執筆を通じた教育実践の重要性を認識いただけたことなどが功を奏している。また、SSTA 各支部での論文応募への機運の盛上げや、各種研修会にて論文応募に関する説明をするなど、年間を通じた地道な活動が確実に論文数の増加に結び付いている。また、「幼児教育支援プログラム」は若干の減となったものの、全国各地の保育所・幼稚園・認定こども園での論文説明会や、SSTA の先生方の協力による各地の園への広報にも努めており、来年度に向けて強化していく。

2. 教員に対する支援

(1) SSTA への支援

実践論文の募集と並んで、教員への支援には長い歴史があり、現在は、「ソニー科学教育研究会（SSTA）」による活動を主軸に助成している。特に SSTA の主要な研修会は、支部（都道府県）を越えて各地から教員が参集する

宿泊研修であり、各地の教員が、密度の濃い議論と質の高い研究・研修を行うことが、他団体にはない活動の特徴である。また、SSTA 会員への確実な情報の提供、会員意識の高揚、活動への理解浸透が重要であり、これを目的とした「SSTA 通信（年 2 回発行）」の第 3 版を 5 月末に、第 4 版を 1 月末に発刊した。「科学する心」の理解を深める有用な情報、研修会の案内や教材の紹介、支部や会員の活動報告など、会員に有益な情報を掲載し、会員一人一人に直接、郵送するなど、会員から高い評価を得ている。加えて、「SSTA 専用ホームページ」を全面リニューアルし、ユーザーフレンドリーな画面構成と良好なアクセス環境を整えたうえで、ものづくり体験や教材アイデアなどの豊富なコンテンツを掲載したことで、アクセス数の向上につながっている。

（2）理科教員への支援

SSTA に所属する 35 歳未満または採用 10 年未満の若手教員を全国から公募し、8 月 17～18 日の 2 日間、16 名が参加して、2 回目となる「理科みらい塾」を開催した。「科学する心」を育むうえでの両輪となる「理科の授業づくり」（講師は早稲田大学教授 露木和男氏）と「科学の原理・法則」について、自ら指導案作りを取組んだり、実験・測定を行ったりして、理科の授業についての理解を深めた。また、2 日目には、ソニー(株)でオーディオ機器の開発に携わるエンジニアから、実物のデモや技術的な解説を聞いたり、開発現場を見学したりする機会を設けた。参加者からは高い満足度を得ており、有意義な研修とするためにカリキュラムを見直しつつ、毎年、開催する。また、できるだけ多くの全国の教員にこのような学ぶ機会を提供するために、「理科みらい塾」のカリキュラムから、「科学の原理・法則」を実験・測定を通して学ぶセッションを抜き出し、SSTA の支部に出向いて行う「理科みらい講座」を今年度から始めた。年間を通して 8 支部で開催し、約 150 名の教員に参加いただいた。参加者の評価も高いことから、継続して実施する。

（3）海外の教育団体との交流活動

教員の海外派遣については、今年度、本プログラムで初めて SSTA 会員を対象に“公募制”を導入。数名の応募者から、「海外で理科授業にチャレンジしたい」という強い意志のある教員 1 名を選考（以前は SSTA 理事会による推薦制）。現地校では、オーストラリアの教員による理科授業の見学、日本の教員による「“日本流”理科特別授業」、教員同士のディスカッションを行う他、帰国後の授業に役立てていただけるよう、ASTA の協力を得ながら CSIRO Discovery Centre（オーストラリア連邦科学産業研究機構）、Geoscience Australia（国立地質研究所）、NASA Deep Space Center（キャンベラ深宇宙通信施設）などの施設見学を実施。公募で参加された教員からは、「教員人生が変わるくらいの体験」との感想が聞かれた。一方、ASTA 教員の受入れについては、ソニー子ども科学教育プログラムで「優秀校」を受賞した小・中 2 校と、愛知県下ではトップレベルのスーパーサイエンスハイスクールである刈谷高校を訪問。オーストラリアの小・中学校ではロボティクス授業が必修化されており、来日した 3 名のうち 2 名は、小学校で STEM(※)教育やロボティクス教育の研究をされている。

※ STEM: Science, Technology, Engineering, and Mathematics

3. 科学の泉－子ども夢教室

「科学の泉」は、「自然に学ぶ」をテーマに、白川英樹理事を塾長として、仲間と寝起きを共にしながら、自然とのふれあいを通して科学を学ぶ活動である。第 12 回は、2016 年 8 月 7 日（日）～12 日（金）の日程で、昨年に引き続き、長野県小県郡青木村で開催した。運営面では、昨年と同様、青木村からの絶大なご支援をいただき、自然豊かな環境の中で、28 名の塾生と 7 名の指導員が活動した。導電性プラスチックの実験では、新型の小型アンプを採用したことで、これまでより大きな音のでる透明フィルムスピーカーが完成し、塾生のよき体験、思い出となった。

4. ソニーものづくり教室

「ソニーものづくり教室」は、2007 年より全国の小・中学校の児童・生徒の科学への興味や関心を高めることを目的に、

“ものづくりに関する体験教室”を継続している。「ソニーセミコンダクタマニュファクチャリング山形サイト」、「ソニー生命京都支社」が新たに参入し、これまで開催が無かった地域での「ものづくり教室」が実現するも、継続実施ができなくなったり、開催回数を減らしたりするグループ会社もあり、開催数、参加人数ともに減少する結果となった（昨年実績は 44 回で、本年見込は 30 回）。新しい企画として、SSTA に所属する小・中の教員を対象に、「ものづくりの教材アイデア」を募集したところ、5 件の作品が寄せられた。多くの教員に興味を持っていただき、学校や家庭で試してもらえることを願い、SSTA ホームページに作り方と動画を掲載するページを設置した。

以上